

絵入都々逸本・翻刻

菊池真一

凡例

- 一、本稿は、「翻刻・絵入都々逸本」(片山享編『日本文芸論集』所収。平成十五年三月)発表以降入手した都々逸本の翻刻である。
- 一、底本十二点は、全て菊池所蔵本である。
- 一、漢語都々逸の漢語の一部分以外、振り仮名は省略した。
- 一、意味を取りやすくするため、適宜濁点を補った。
- 一、文句入りの部分は「」で包んで示した。但し書名の最初についている「」は角書きを示す。

- 一、作者名は()に包んで示した。
- 一、判読不能文字には?を充てた。
- 一、配列は推定成立年代順とした。ただし、「幕末刊」「明治初期刊」とある複数の作品の順序については意味がない。詳細は不明である。
- 一、紙数の都合により、底本の書誌は次のウェブサイトを参照されたい。底本の画像も掲載してある。

<http://www.konan-wu.ac.jp/kikuchi/>

一 新板どゞいつぶし上巻・しん文くどゞいつぶし下・

新板月雪花撰文句どゞいつぶし上

(幕末刊か。八丁ホリ茶吉板)

新板どゞいつぶし 上巻

△ちる花をさためなき身とうたにはよめどさかさなるまへ春の風
△わけもないのにきにくせつけてかほみにやくろうでねつかれぬ
△いろにまよいし身はとうがらしなみだめにもつこゝろがら

△ほれたわたしがうるさいならば(上るり) そんなそのよない、わけをそれよりわしがいやならば) ほどよくうまれてこぬがよい
△人目おふけりやツイそれなりにないてぢれふすみだれがみ
△せきにせかれてそのうへならず(しん内) かわいやこの子を手ばなしてどふしてかたときいらりようふか(▲ことば) さあくしいをしてあすはとうからおしなれねへやれくねんねこよほんにかわいやねがほさへ) ちゃんにそのま、いきうつし
△わらはれ草なるわしやわらぞうりすへにやきれてもなは残る

しん文くどゞいつぶし 下

- ▲両手をくんでかんがへみれどおもひきられぬぬしの事
- ▲ほれたおかたによくにた男じつがあるやらきかまほし
- ▲しんでわかれば此よのならひぬしとわたしはいきわかれ
- ▲さげにまぎれてうらみもいへどしらふぢやしらけて向づら
- ▲さがさがさならくろうをしたるかいもなきさのあまをぶね
- ▲いへばどうやらさいそくらしくいつまでそはづにいらりようか
- ▲せかれてる身のまたこうしさき(新内あはしま) アノおまへは丹七さんかとおどろけばほうばい女郎もやほなかんすいつけたばこもわれがちになみだともにかたりおふやりてのすきがこいたかくまた一つところへよりあはづとてんくにはなれていやしやんせくせのわるいとわめかれておとは、かほみてうれしいやらまたかなしさがありましたやら) しれてかむろにやつあたり

新板月雪花撰文句どゞいつぶし 上

- ▲よふくとしのびあければらんまがしらむぢれてかみきるふさよふじ
- ▲ま、ならぬ世とあきらめてもかほみりやくちをゆうて心でない

- ▲あつい御げんにまた御いけんもき、いれましたがきれられぬ
- ▲恋やみでしよくものんどへはとふりはせぬがくいつきたいのはぬしのかほ
- ▲いつヶけのつもるはなしにけさしきかへてへやのしきへのたかいこと
- ▲にくい人だどくちではいへどぢつはいのちもいとやせん
- ▲ないていずともふみでもかいてともだちをたのんでよぶがよい
- ▲ともだちよふたのめばみなうはのそらくきはあれどもぢつはない
- ▲しみくゝとだいてねもせではたからせかれ (しん内) どこにとふしていさんすやら人のうはさによしあしをきくにつけてもきぐるふはつりくゝてしやくとなる」とがない子よくにやつあたり
- ▲あきのそらかよ身をさらしなの (しん内) うつりやすしよ木はもみじくもなくはれて月のゑん
- ▲ふかくなるほどだがへのこゝろ (しんない) はだとくゝはしらゆきのともにきゆるもいとやせん」つもるおもいもねてとける
- ▲木になる此のみをまた白梅の (しんない) あいたみたさがとびたつばかりかこの鳥かやうらめしや」とめてはつねをたのしみに
- ▲しの、めにわかれせわしきみおくるすがたきりがじやましてま、ならぬ
- ▲としがちがをが女房によほがあつとじやふをたてずにおくものか
- ▲き、わけぬいかに年はがゆかぬとゆふてほかにおこのこないよふに
- ▲き、わけましたがわしやきれられぬたとへなわめにかゝるとも
- ▲ほつとためいきなみだとともに (しん内) なんのいんがでこのよふにいとしいものかさりとては) 身につまされて一とりごと
- ▲おろすわさびとこいじのいけんきけどう? ほどなみだでる
- ▲はだとくゝをだきしめおふてこふもかわゆくなるものか
- ▲おもいだしはたでちろりとかんづけられてはづかしそふにかほにそで

一一 撰ど、一ツ三べん (幕末刊か)

《大津絵節省略》

てい女立たり気がねをしたり (しん内 白藤源太) いとしとおもふ心から三とせ此方ござんおほへがござんせういけんがまし事とはついに一度もいはぬのはひよつと心にさばりなばあいそがつきそらどうせうと) 人にやこけだといわれたり (八丁ホリ 瓢多長)

三味せんの駒のきん所でむまれたわたし (清元 二人奴) そもや二人が中々は心でこがれ

まちあかしあふて嬉しき戻りかごたがいに胸をうちあけて気も合はれのすいたどしかはるまいぞと云しての神々さんへちかいかけ) ばちでもあたりにやきれやせぬ (八丁ホリ 千好)

月にむら雲花にはあらし (あふむ石 女清玄) ア身は雲水の定めなき仏につかへ奉来せをねごふも何ゆへぞい、なづけせしおんかたのこの世になきとき、しゆへのぞみなき身とあまほうした、なざけなきは清水にてお目にか、りし頼国さますぎゆきたもふとさたありし松若様の姿糸にたこそことほりげんざいのア、わすれたいくゝわすれんものとねがふても心のまよいかあさましやたゝわすられぬやぶうぐいすはほけ経とと経よむ鳥の花をこふまだあのやうになきつれて花を見すて、かへるア、心々の世の中じやなア) 思ふおかたにやぬしがある (千蝶)

《端唄省略》

《端唄省略》

はらた、せぐちをいうのもみなじつぎから (しら糸もんど やんれふし) これさわがつまもんどさんわしが女房でやくのじやないが十九二十の身じやあるまいし人にいけんという年頃でけふもあすも女郎かいはかり) とふぎの花なら言はせぬ (八丁ホリ 千蝶)

人はちよいと見てちよいとほれするが (常盤津 将門) さがやおむろの花ざかり浮気な蝶も色かせぐるはのものにつれられて外めづらしき嵐山ソレおはへてか君さまのはかまも春のおぼろぞめおぼろげならぬ殿ぶりを見初て染て恥かしの森の下露思ひは胸に) わたしやく見てよくほれる (古キ店 千賀)

《大津絵節省略》 (八丁ホリ 上千)

ほれちやいれどもい、出しにくい (常盤津 小ひな) 秋のほたるの身をこがすはかないこいじやないかいな) さきの手出しを待ばかり

《端唄省略》

《端唄省略》 (中橋住 喜三)

あきらめましたよどふあきらめた (常盤津 高尾) うつり香のこるとこの内たれにかみせん化はひ坂風がもてくるしのびねの姿そゝろのうき名たつ) あきらめられぬとあきらめた

《端唄省略》 (テツホウツ キチ)

くぜついふてもねがはれたとし (常盤津 しのぶ売) 二世のかためとだきめてつい手枕のそ、けがみ) とけて嬉しきねやのうち (八丁 千蝶)

《端唄省略》 (一ノ橋 二ノツ女)

じつとだきメかほうちながめ (常盤津 源太) 枕の下へやる手さへつとめはなれてばかりしい) こふもかはゆくなるものか (古キ庵)

なくもじれるもふさぐもおまへ（長唄 辰巳八景）さだめかねたる秋の空だまされたさのしんじつに）きげんをすも又おまへ（古き庵 千蝶）

二階せかれてあはれぬこの身（清元 おさん茂兵衛）なむとかくごはしながらもまたもやぐちをくるじゆすの玉もおさんが気にかゝる）またのこげんも神だのみ（八丁ホリ 松楽）春かぜにうかれあるいてうか／＼土手へ（一中ふし 吉原八景）日本一の大門口瀬田の夕せふいまこ、にゆふ暮てらす仲の丁）のぼりつめたる浮気なおまへ

《端唄省略》
《大津絵節省略》

おもひ切とは死との事よ（清元 おそめ）ひとりみらいへいつて見や男心はそふしたのか）はものもたない人ごろし（松二）

《端唄省略》（八丁ホリ 松寿）

三 浮世都々いつ 初へん・二へん（幕末刊か。吉田屋小吉板）

浮世都々いつ 初へん

羽子をつく／＼あんで見れば風にそれたも気にかゝる（梅ボリ鶯我）

のぼりつめますほうずもなしに糸のありたけ奴唄（浅クサ 唄女とめ）

花の兄イといはる、梅だ人にけぢめをとるものか（都雄二）

ゆきかさくらかとほ山どりのおまへはあらしのしたご、ろ（梅ボリ喜三）

腹がたつならわたしのからだご、ろまかせにしやしやんせ（梅ボリとく女）

めぐるいんぐわの車のわたしひくにひかれぬこのしだら（梅ボリ玉我）

お客をとる気はしみ／＼ないがうつりかはりにこまるゆへ（梅ボリ喜作）

女房にしちやくどかせむりがりさせてなまけてゐるものほどにしな（梅ボリ語笑楽）

西行のふるしきならねどわたしのからだ一生しよつてゐるがい、（梅ボリうた女）

せつかんもなんのいとをふいのちもやつた男ゆへなら苦にはせぬ（浅クサ 唄女はん）

浮世ど、逸 二へん

見まいとおもへどついおたがいかは見あはしてはしらぬかほ（梅ボリ小てふ）

くぜつの種なしはだうちとけずかほはいつでもはつもみち（全）

うつ、こ、ろではしらにもたれおきてゐながらぬしの夢（梅ボリ語笑楽）

けふかあすかのかはい、中も淵が瀬となる世のならひ（梅ボリ常二）

身にはおひへをまつてゐてもこ、ろに着てゐるあやにしき（梅ボりとく女）

いろのあるのを初手からすればかうしたわけにはならぬもの（梅ボリ横利）
なれないま男ていしのかほに泥のつくはづころぶゆへ（サクラ川新孝）

うはきといはれりや一言もないがおまへに見かへる初手のいろ（梅ボりとく女）
女房かたぎではなこそさかねじみなみさは雪の松（梅ボリ唄たね）

屏風ひとへのわか床なればしんのはなしはのこりがち（浅草大工徳）
しらぬたびねもおまへとならば夜みち雪みち苦にはせぬ（梅ボリ小きく）

娘のいろだともだ気もつかずりこうな人だと親がいふ（梅ボリ横利）
はなもさかせずつばみの枝をおつたわたしのつみつくり（梅ボリ玉我）

見とめもつかないはかないわたいやになつたらよしにしな（梅ボリ東障）

四 「辻占端唄」とゞ一大よせ

（慶応二年以前刊か。春霞楼主人編。）

大坂河内屋茂兵衛・綿屋喜兵衛等版。下段の端唄は省略。）

夫易は聖人の建る処にして強ち物を以て其名状を当る緯本儀にあらざと雖既に三国の代に官輅あり亦我朝には阿陪清明ありて吉凶禍福を占ふ今や僕が著す所の恋廻唄占は陳分漢の唐くさきを言ねど又大和言葉のいとやさしき三十一文字の歌にもあらで三筋の糸のいとほかなき都々逸の唄にて其意を知らしめんとす是ぞ童蒙兒女子等の独占ひ判断を心で做すの便りにもと余計御世話の所業ながら書肆の需に應じたり倘人ありて心中の願事を人に知らさでしらんとならば算木まれ銭まれにて乾兌離震巽坎艮坤の八卦六十四卦を占ひ上層の唄を讀ば善悪吉凶忽に知るべし尤下の唄は其易の変爻を表したれば上下の意違ふべし是は口伝ありといへど譬ば意中に願事ある節花の曇りの唄を聞ば乾為天としり其唄をよみて吉凶を占ふなり故に常に一本を懐中なせば途中にても進退を占ふに便利ありて実に有益の一大奇書ならんと爾云

東武 春霞楼主人識

乾为天

果報まけてまごつくよりも時をしづかに待がよい

此卦は公家大名以上の貴人には吉なれども平人には悪し尤武士出家などには吉事と見ることもあり万事す、みては凶也

坤为地

心しづかにじせつをまてば岩に矢のたつ時もある

此卦は地の徳にして万物を生養するの形なりゆへに人の事に世話苦勞あり願望その外相談事

段々と、のふべし

山水蒙

はじめわるくもすへよいならば手鍋さげるもいとやせぬ

此卦は童蒙の義なれば童の段々と智恵づくごとく宜きに向ふべし必ずいそぐべからず諸事簡らがひあるべし慎むべし

水雷屯

先にあくまでその気は有ど花にあらしの邪魔がある

此卦は草の始めて生じいまだ伸たるの意にて万事につけその兆はあれども相談ごと願望等にも邪魔ありてと、のはぬなり

水天需

胸のもやくやいつかははれて月の顔見ることもあり

此卦も急にすべからずたとへば川留にあふて居るの意におもふべし無理にわたらば怪我あるべし

天水訟

人の心はやぶれた屏風はなれ、の蝶つがひ

此卦は上下別々になりて相交はらざるの義背争ふの象也故に諸事と、のひがたく心身やすからずして憂ひかなしむこと多し

地水師

人のはな見ておる気になればいつかをられし我花を

此卦は大人の徳あれば忠臣孝子には吉也たとへば一人の美女を恋慕ふに大人ならば得べし小人ならばかへつて我物送人にとらる、の象なり

水地比

はれて夫婦の盃なしてこんなうれし事はない

此卦はしたしみありて人と相和樂するの卦也故に知音朋友親るなどの力をそへらる、ことありて万の望みごと叶ふなり

風天小畜

たつた一重の障子じゃけれどへだてられてはいいかぬ

此卦は物ごと塞りと、むるの意あり又目に見て手にとられぬ象なれば万事急に調ひがたく常にしんくのかさなりて憂ふるすがたなり

天沢履

こわいとうげをしのびてこせば今じゃ枕で高いびき

此卦は礼義の心あり又進むの義あり又進むの義あり始は驚くことあれど後には喜となる故に

あやふけれ共破れず驚けどもやすし

地天泰

月もみつればかくるがならひらくは苦のたね苦の世界

此卦は貴人にはよし常人は悪し奢侈安逸のこ、ろ樂きはまりかなしみ生じ又月なかばをすだくやみをむかふの象なり

天地否

はじめや深山のすまゐをしても末にや都の月をみる

此卦は物ごと塞りて通ぜざるかたちなれば末には榮ゆる卦なれば辛抱を專一とすべしつひには志をとぐるの時あるべし

天火同人

心清けりや末にはつひにみそこしすて、玉のこし

此卦は人心同じくして親み深き意にして万事正直なれば人の取立にあづかり立身出世あるべししかしその心まがれる人には大凶なり

火天大有

朝顔のはなはきれいにさくとはいへど盛りみちかくちりやすい

此卦は天上に有て照わたるごとく人も時を得たるなれどこれも位まけのしてすへて損失おほく苦勞あると知るべし

地山謙

こんなお福とひげしておればとんだ福者に身をよする

此卦は先に屈んで後に伸るの卦也ゆへに何ごとと、のひがたく苦勞多ししかれども身をへり下りてをれば後によきこと来る

雷地予

龍も時くりや天へものぼるわしも時きてぬしにそふ

此卦はよろこぶの義あり雷地上にふるひ出て天にのぼるの時也万物和順して人もおもふ儘に立身出世のよろこびあり

沢雷隨

いつそこ、をば倉がへなしてぬしのきま、な判にしな

此卦は小女長男に随ふの意あり我動かれ悦ぶまた枯木重ねて茂る卦なれば物の変りて吉ゆゑに住所をかへて利あり

山風蠱

棒ほどねがへど針ほどきかぬほんにうきよはま、ならぬ

此卦は山中に風を含みて吹出し懐るの意にして諸事につきて難義迷惑する事ありゆゑにすべ

ての願望叶ひがたし

地沢臨

とかく女は柔和になしてほれたと見せずにはれしやんせ

此卦は貴賤相交りて親むの義なり故に物事柔和にして吉剛気なる事あしし横合より難渋など言かけらる、事あるべし

風地觀

おもひがけなき雨にはあへどはれてことなき夏の空

此卦は晴天に雲の起るごとく思ひ寄ぬこといできて苦勞あるべし然れどもその雲を風の吹はらへばさらに障りなし

火雷噬嗑

はるの泡雪とくるも早き夫婦げんくわの闇の中

此卦は頤の中に物あるの意にして障りあれどもかみ合せて通ずるの義あれば始め調ひがたくとも後には調ふべし

山火賁

ぞつとするよな器量のうへににききせたら猶よかろ

此卦は虎の林を出て遊ぶの象なれば物のうるはしく又威あるの意なり立身出世あるべし諸の願ひ叶ふべししかしよくかわくべからず

山地剝

仏いぢりをさらりとやめてけふより精進おちました

此卦は枯木の栄花を発するの卦なれば今より新規に物を取始むるによろし然れども高きより落たる象あれば人も身の上安堵ならず

地雷復

たとへ一度ははづる、とても思ふ的ならばづしやせぬ

此卦は家を破りてふた、び復すの意なれば一度は悪くとも重ねては吉事に向ひ諸事おもふところを成就すべし

天雷无妄

玉も包めば光りがしれぬぬしもこ、ろをあかしやんせ

此卦は石中に玉をつ、むの卦なれば諸願叶ひがたし時の至らざると知るべししかし己が欲にせざる事なれば願ひ叶ふべし

山天大畜

水は下へとながる、ものを上へ船やりや逆となる

此卦は乾良あい逆するかたちにて住居常にあんおんならずだん心中にいかりをふくみ恨み

をおもふゆゑ安気ならざる義なり

山雷頤

雪をかきわけ桜はさかぬとかく時節を待がい

此卦は養ふ義にして物の成就する卦なれどもしかし時節の未はやく意あり急にすることはよろしからず

沢風大過

された風ではわしやなければどもちうにまよひておるわいな

此卦は棟撓のかたちなり上ずることならず下載ることならず中に迷ふの意なり故に何事も不定にして思慮やすからぬなり

坎為水

男心は紫陽花よいつと定めぬ花の色

此卦は難義困窮の卦にて二人水に溺る、の象なれば遠く住所を去てよし常にかわる怪しき意有と知るべし

離為火

はつと立たるあの村千鳥風のまに〜わかれゆく

此卦は離別の卦なれば親子兄弟或ひはしたしき朋友などに別れ遠ざかるなり然れども学者出家などには大吉なるべし

沢山咸

寝ごみへ持こむこの牡丹餅はほんにうれしい口果報

此卦は感通して物の速に調ふの卦なり故に思はざる吉事ありて万の願望万事向ふより深切に世話してくる、なり

雷風恒

風に吹ちるあの紅葉はどこへよるべきあてもない

此卦は物の散失するの意あればあつまると思へばちり散と思へば又集るゆへ更に定まらぬ也住所につきとかく苦勞ありと知るべし

雷天大壮

虎に角ありやいひぶんないがそれじやつぱりがいになる

この卦は陽気さかんにして壮はすなはちさかんなれども花ありて実なきがごとく大吉に似て吉にあらず金銀財宝にくらうあり

天山遯

いつぞ深山にかくれてあたらこんな苦勞をしやせまい

この卦は退くよみ住所などについて辛苦多く思慮ふんべつも定まらず諸事間違ひのある卦な

り願望は邪魔するものあり

火地晋

ぬしとわたしは朝日の症で昇りかけては下りはせぬ

此卦は日の地上に出るの象ありて次第くにはん昌して立身出世におもむく意あり又人より親み敬まはれ上たる人の恵みにあふべし

地火明夷

三世相にもよくあるやつよ始めわろくてのちはよい

此卦は日の地中にありて分明ならざるの意あれば始めは思ふ処をうしなひ難義をすれど後には榮花の身ともなるべし

風火家人

世帯の車は女の事よ糸をとる気でよくまはず

此卦は家内安寧するの卦也万事によること婦人を以てすれば吉なりししながら当世の人かくのごとくなる女少し大に撰ぶべし

火沢睽

しん気辛苦の種時ながらとかく宝の芽を出さぬ

此卦は人心相そむきて万事ことなりがたし故に人中辛苦多く又財宝散乱することありし学者などには大吉ありとす

水山蹇

あきが来たとして梢の蟬もほんに朝ばんなきあかす

此卦は寒中に蟬風をかなしむの意にして又龍の玉をうしなふの象也ゆへに宝さんざいして甚しく貧苦にせまるの卦なり

雷水解

やつと苦界のかどとび出してそらに羽をのすはなし鳥

この卦は魚の網を通れ出たるの意にてなやみ解ちるなり故に難義なる所をのがれ出る卦なりしかれども慎まざれば再び災あり

山沢損

勘定づくには浮世はいかぬ損して徳とることもある

此卦はもと減少とて物の損失ある卦なれども却て宜とする象あれば後にいたりて利徳をうるか又誉れるか末よき卦也

風雷益

みづがうごけば船までうごくほんにあぶない浪のうへ

此卦は上下とも動きてしづかならず故に住所やすからず心身定まらず辛苦ありて思ひよらざ

る損毛有慎むべし

沢天夬

床にすへたるあの芥子の花そつとおかねば花がちる

此卦は剛強に過るの卦なれば性急にして万事やぶる、なれば慎むべし故に人は堪忍柔和をむねとしてかりにも情をおもふべし

天風姤

やつとあつめしあの落葉をば風がおとして吹とばす

此卦は物のあつまと散うせる象ありて定りなきなれば人も分別工風さだまらずして迷ふ也又おもひ寄らずあひあふの意あり

沢地萃

人のあつまる両国ばしは常にけんくわのたへはせぬ

此卦は物の集会してはん昌するの意なり故に又争論障り常であれば慎むべし願望かなふべし婦人のさまたげすることあるべし

地風升

もとは二葉の芽ばへだけれど家となるやうに木にもなる

此卦は草木の地中に有て次第く地上に発生する意なれば段々と立身出世をすべし

沢火困

わしが思ひは百分が一もぬしのかたへは通ふじやせぬ

此卦はこんきう難義の卦にして諸事ふじゆうに我こ、ろざし人に通達せず苦勞多き卦也

水風井

もと木にまされるうら木はないに心うごかす事はない

此卦は万事あらためかへることよろしからず各あたりまへの職分をつとめみだりに新規の事にとりかゝる事なかれ損ありて益なし

沢火革

うしを馬ならのりかへしやんせ願ひかなはぬ事はない

此卦は万事改むるによし今迄なすことに益なければ速にそのふるきを捨て新しきにつるべし願望障りあれどもと、のふべし

火風鼎

ふゆの水と心がとけぬそこで口舌がたへはせぬ

此卦は常に口舌のたへぬ卦なれば慎むべしゆへに願望思ふま、に叶はずして病ひの変あるべし是おそる、とやぶるの意あれば也

震為雷

声はなしても姿を見せぬ雲間がくれのほと、ぎす
此卦は声ありて形なきの卦なれば祥瑞ありてはん昌の象なれども大てい平人にはよろしから
ず位まげすることあるべし

良為山

そこは土腐だに用心しやんせ跡へかへれば怪我はない
此卦は止るよろしく進むに損あり憂喜の山重なりたる義とす故に物ごと半は調ひ半は通達
すべし

風山漸

野辺にはへたるあの若松もすへにや枝葉の生茂る
此卦は山上に木をかへて茂生するの意にて立身出世あるべし又女の男を思ふの卦なるゆへ婚
姻と、のふべし

雷沢婦妹

おもひ願ひはみな違ひ棚床のすへものわしやいやじや
此卦は不意にまちがひの有卦なれば慎むべしまた色情につきて苦勞あり且願望さまたげあり
雷火豊

水にうつれるあの月影はめには見るのみにて手にとれぬ

此卦は盛大の勢ひある卦なり然れ共余り大すぎて却つてそのかたちを失ふたとへば水中の月
のごとく目に見て手に取れぬ意なり

火山旅

花もつぼみが匂ひはふかいひらきすぎては曲がない
此卦は始めよろしく後わろし万事に付つ、しむべし又月の半出たる意あれば少事はよしその
心にて占ふべし

巽為風

あたる矢さきを風ゆへそれで思はぬ苦勞もするわいな
此卦は通達の意ありておもふことを遂るの卦あれど横合より思ひよらぬ障りありて事を仕そ
んずる事有べし

兌為沢

こゝろはやしやでも菩薩でも顔にたれしも迷ふはむりもない
此卦はよろこびの顯はる、卦にしてよき卦なれども物事取しまりなく埒あかぬ意あり外見は
よく内心よからぬの意あり

風水渙

うきくさのなはきれいにさいてはるれど風のふくたびみだれあふ

此卦は物のちりとくるの意ありて悪事の身を離る、の吉兆とす然れどもちりみだる、義あれ
ば損失あるべし

水沢節

小さな石でも邪魔するときは大きな車もうごきやせぬ
此卦は物事滞りてさはりある卦也ゆへに運つたなくとちふさが象にて万の願望叶ひがたき
と知るべし

風沢中孚

おのが心を善悪ともに鏡にうつして見やしやんせ
此卦は誠あるの卦にして心中正直ていねいなれば吉とす我邪の心あれば大凶にして目前には
つあるべし

雷山小過

ひとつ叶へば二つのふそくほんにねがひはたへはせぬ
此卦は物の十分にみてんとすれば又不足のことを発し調ひがたき卦也しかし大きな災なけ
れどもつねに苦勞あるべし

水火既濟

おもひみだる、風野のす、きとくとにかれぬ胸のあや
此卦は物の乱る、始めとす故に一旦は成就するとも末には破る、也色情の事に苦勞あるべし
慎むべし

水火未濟

なんぼきれいな花びらとても落たうへにて実をむすぶ
此卦は物の成就する卦なり然れどもいまだ用をなさずといへど後相まじはることを吉兆とす
るゆへに願望と、のふべし

九曜星の吉凶の事

日曜星

風をうけたるあの帆懸おねおもひふりにのしてゆく

此星にあたる年は万よくして家業はんじやうすべししかしゆだんをすれば損あり

月曜星

旅もするもの思はぬ所で金の弦をばほりあてる

此星にあたる時は万事よしたび他国して仕あはせよく思ひよらざる幸を得る事あるべし

羅喉星

せんじつめたる葉のやくわんみがきあげても光りやせぬ

此星にあたる年は大いに悪く財宝をそんずるか又は病難あるか親るい他人の事によりて辛苦あるかなり

土曜星

さきのされたる箒じやないがはかなき此身のさつしやんせ

此星にあたる年は万事よろしからず望みごと願ひ事何ごととも一切かなはぬ年なれば憤むべし

水曜星

ぐるりく〜とまはりておれば水るひまなき水車

此星にあたる年は先よしといへどもその職におこたるときは悪しゆへに随分精をいだけばよろこびごとかさなるべし

金曜星

若葉のうちをばだいじにすればすへにや枝葉のおひしげる

此星にあたる年は春のうちはあしく親るいか父母にはなる、ことあれどしんとすればよろこびごと重なるべし

火曜星

江の嶋細工のびやうぶぢやないがばらく〜はなる、春の雨

此星にあたる年はよろしからずおや兄弟親ぞくにはなれることあるべしさもなきときは金銀財宝をそん失なすべし

計都星

水かさまさりしあゝの泪川わたりかねたる世のたつき

此星にあたる年は万事大いに悪し泪のかわく間あるべからず尤夏のうちは別して悪しといへども秋より少しよし

木曜星

かさね〜のめでたい事にかさね〜の酒をのみ

此星にあたる年は万よしとへば春にあふて木の芽をいだがごとく次第にうんのひらきて幸をかさぬべし

生れ性十枝の吉凶

奇光枝 きのえのとし

おもふことかなふ福介打出の小づちおかめに見てさへ楽隠居

此枝に生る、人はわかきときはひんなれども段々と思ふごとくになりて末には大いなる福徳を得べし

金財枝 きのとのとし

行末は海となるべき谷水なれどしばしこの葉の下をゆく

此枝に生る、人はわかきときはおもひごとたへず人にあたまをおさる、なれど次第に出世をなして大海のひろきへ出べし

千歳枝 ひのへのとし

もとは裾野をとふりて来たがのほりますぞへふじの山

此枝に生る、人は段々富貴にいたり官にす、むの相ありてつねに目上の人に愛せらる、ゆへ引立にあづかり出世をなすべし

銀宝枝 ひのとのとし

かぜに羽をのすあのかのほり糸のひきてのあるゆへに

此枝に生る、人は前に同じく貴人高位のてうあいにあづかり段々と幸を得べし信心うすき人は苦勞あると知るべし

散高枝 つちのへのとし

萍のしかとところはさだめぬけれど花もさくなり実もむすぶ

此枝に生る、人は田畑にえんあるといへども常に住所につきてもの言たへず苦勞ありしかし財宝にえんありて十方よりあつまるべし

天高枝 つちのとのとし

うめと桜は一時にさかぬ咲ぬはづだよ時がある

此枝に生る、人は無口にして空言をいはず福分ありて命ながしといへども子なし若子あるときは福分ありといへども老てまづしくなるべし

五柳枝 かのへのとし

猪し、むしやともいふならいやれ義を見てうしろは見せはせぬ

此枝に生る、人は上へは心しづかにして下心ははげしく学文に心ざしあり但し短氣にて財宝身につかねど義を見てはあとへ引ぬ性なり

虚部枝 かのへのとし

所がへしてすゞめじやさへもひなをそだつる親鳥のおん

此枝に生る、人は正直なれども心たくおやに不孝なるべしゆへに住所をかゆるのなやみあり孝ならばよし

豊陽枝 みづのへのとし

人はなにもいはまのつゝじこちは春くるときをまつ

此枝に生る、人は心しづかに時節をまつべし思ひよらぬさいはひにあふべしとかくに剛氣のことを慎むときは大いによし

柳復枝 みづのとのとし

たとへおふくと笑はゞわらへみめより心がしんの玉
この枝に生る、人は心正しけれども人のそねみをうくべし殊に女はみめかたちうるはしくして
妬をうけ大難にあふべししんくをなすべし

十二支生れ年吉凶

子年 坎中連

三味線のどうせはなれる二人がなかはきれた糸ならかけかへる
此年に生る、人は衣食にえんありて常にしづかなることをこのむ性也しかしふうふのえん薄
くはじめの縁かはるべし

丑年 艮上連

はしめ大きく中たびへこみ末にやふくれるなりひさこ
此年に生る、人は身上はじめはよく中ごろ悪くなり年よりて又仕あはせよくふつきはんじや
うなるべしもつとも此人はちえかしこき生れなり

寅年 艮上連

からみついたる毒草とても秋の末にはうらされる
此年に生る、人はさいなんお、くしてその身わづらひた、るべししかれども三十過てより
段々と仕あはせよく財ほうにえん有べし

卯年 震下連

梅よ桜よ柳よ桃とさうは両手にもてはせぬ
此年に生る、人はちえさいかくありといへども余り諸芸をならふ事多くしてとげがたしもつ
とも財宝にえんあるべし

辰年 巽下断

文字にかいても身をたつとのしのはりまずぞへ雲までも
此年に生る、人はちえかしこくともほうばいの中ねんごろにして段々と立身出世をなすべし
しかし女房のえん薄くたびくかはるべし

巳年 巽下断

一升つまらぬ五合のうつわひろくもたんせ心もち
此年に生る、人はこ、ろちいさくして常におもひごとたへず又人をそしりねたまむ性なりこれ
前生は女人なりしゆへ業ふかければなり

午年 離中断

千両の鷹もそのばで放して見ねば芸のよしあしわかりやせぬ
此年に生る、人はとかく父母の愛あつくしてその手元をはなれざれども却つてた、ることあ

るべし別に家やしきもちてよし

未年 坤皆断

かねの宝はつみおくとでも金でかはれぬ子の宝
此年に生る、人は前生にも、命を多くとりたるむくひにて今生にては子のえんうすくた、
るべししかし財宝はみちたるべし

申年 坤皆断

質屋のばんとうくどくにさへも言葉お、きは品がない
此年に生る、人はつねにことば多きさがゆへしそんずることありつ、しむべし又たび他こく
をかけまはり辛勞することあるべし

酉年 兌上断

道の真中にはへたる草はあたまあげるとふまれます
此年に生る、人はとかくにうんをおさへらる、かたちありて若年のうちはくらうたへずかつ
親兄弟にえんうすけれどちえかかあるべし

戌年 乾皆断

小川ながる、落葉を見なようきつしづみつ海へ出る
此年に生る、人は若年のうちはたびくうきしづみありて苦勞あれどもすゑには大海へ出し
ごとく立身出世をなすべし

亥年 乾皆断

瓜の種まきなすびははへぬあくのむくひにぜんはない
此年に生る、人は前生に善根をまきしゆへその徳にて今生にても衣食にことをか、ずまんぞ
くなり又手のげいありて財あつまるべし

五性の善悪

木 東の方 青色 歳星

のぼるあさひのいきほひつよく四方にひかりをしくわいな
此性にうまる、人は朝日の昇るいきほひありて誠にめでたく時めくべし尤万事ひかへめにす
べし

火 南の方 赤色 熒惑星

赤いしかけはめにつくけれどさのみうまみはありやせまい
此性に生る、人はめのうへの人の引立にあづかるといへどつひにはわかる、事あればつ、し
むべし親兄弟に縁うすし

土 中央 黄色 鎮星

道もまん中とふりておればどぶへおつべきわけがない

此性にうまる、人は万事ひかへめにして何事も中道をゆけば大いによし少しにてもこ、ろに
ゆだんなさば大なるわざはひにあふべし

金 西の方 白色 太白星

月もみつればかけるがならひ山ものほればくだらんせ

此性に生る、人はあまりうんよくして一時に出世をなすといへど極まりありて又段々とあと
へもどるなればかならず油断すべからず

水 北の方 黒色 辰星

花はさくとも深山のさくら人の見られぬ口おし

此性にうまる、人はちえ才かくありといへど人の見だしにあづからず一生うもれてくらすべ
しこれあまりそのこ、ろのいんきなればなり

五 東天狗木之葉都々々 二編 (慶応三年刊か。石川亭反等集)

行さきは鞍馬山をもなんのその鼻高々とうなる諸天狗

卯とし 石川亭はんとふ

《端唄省略》(大直門人 中はし埋立地 歌沢わか作)

親のゆるさぬいたづら事はよさんせつとめはつらいもの (新よし原江 いせ六内 誰袖)

あしをからんで手でだきしめていやがることがにもむしのきう (宮蝶連 中橋上まき丁 伊東
澗舎)

わたしがこ、ろはたかをもおなじぬしをわする、ひまはない (深川六軒堀 沢村宮吉作)

あだでこいきで人からむきて (富本) かつをくとうるこへはいさみはだなる中はら五十
五メもなんのそのかしのそうばはきなかでもまけぬ江戸子) それでほれずにいらりやうか
(浅草寺地内 かつら文山作)

ゑかふじやうどの儀太夫いりのとゞいつはわたしのむねにある (赤坂ふるや町 市川登理
作)

おとこくるひはもふやめますといふ口そばからめになみだ (八町堀北こんや丁 坂東綿八
作)

たまさかあうのを勤のうさとするも人目でま、ならぬ (八丁堀北掛屋丁 鈴之助改歌名十郎
娘?うとき世作)

突出しの時はなをさら初会はおいて (常磐津せきのと) かむろたちから廓の里へ根として

植てはることに盛の色を) ませばぬしゆへこのくろふ (上楨町一 常磐津文字多勢作)

端唄省略 (江戸町 常磐津文字小寿作)

だまれちくしよめもふ何事も (清元山かへり) あとは野となれ山参りエ、なんのその男
ははだか百メのかけねんぶつもむかふ見づ夜山でほんをすつぱりと) うぬにやあいそがつき
はてた (川四田丁 清元栄吉作)

《端唄省略》(松しま丁 勢連に入 彫加三作)

あれさよしなよこどもわよいが夜なべになくのはき、にくい (桑都連 横山二 石印久作)

こうなりや見さんせまくらのかみと初ものがたりのふでのあと (内神田 二見連 原常作)
あつさまけしてやせたといえど人にいわれぬ事ばかり (桑原連 大七楼 つる女)

人目しのでこれこのよふに (長うたをはらめ)?には??の里そだちのきのすだれのゆ
かしさは玉たれかみをとりあげてたれに見しよとて夕化粧) こがれてゐるのが見えぬのか
(桑都連 横山二 記蝶さく)

おやたちのおおふ参りのるすさいわいにはじめていたるこそでわた (桑都連 南楨町 佐
のじ清太郎)

よこにそむけてあからむかほも (常磐津新にいな) はつかしいことのあるたけを) ふでの
心のかよふだけ (札の辻藤八けん名人十三才栄寿店ふさ女作)

かもめみやことなはかわれともすへはひとつにすみだ川 (久菊連 四日市 印藤作)

ま、よすておけうきよはゆめよ三筋でくらすが身のほよう (勢連 馬喰三 印喜十作)

《端唄省略》(二見連 日本ばし 摺工幸太作)
ぐづぐづしやんすなうきながたてばそわねばたがいのはぢになる (はし本丁二 二見連 印
重作)

われまいとおもふてゐたのにあいがぐりのいつか笑みで、いろがづく (勢連 元岩井丁
彫仙太作)

しのび姿をあの月かけに (常磐津老松) そもく松のめでたきこと万木にすぐれしうはつ
このの粧ひ千年の縁をなして (ここの色見す) 見ればみるほどにたすかた (ひもの丁 勢連
魚源作)

たつたいち夜のあのむつ事いつかおなかにつもるや、(忍連 安羅丁 今けい作)

主おやのおんをわする、わたしじやないがこひちでくらすもわかいうち (大磯宿 かつ女
作)

あはぬつらさにはさわするがさぞやくさめでさとるだろ (久保丁 清水楼 はる女作)
初会にきてはいれどもあのうぐひすの身ま、にあはれぬみのつらさ (ふく山連 久右衛門町
代地 しん女作)

たしかそれかとのぞけばつき夜かげをかくすなほど、ぎす（橋本町四 十三才 三河屋 きく女さく）

あやかりものだよあのゆずのははたとへかれてもはなりやせぬ（元大工町 十一才 にしめや よの女作）

くさめ出るたび又ぬしさんがうはさするかとわらいがほ（檜物町 男美連 筆重作）

おもひきいたといふくちさへもつばがじや（ママ）してい、かねる（大てんま二 二見連 豊印久述）

《端唄省略》（内神田 二見連 原常作）

かけを見せるが人めてあらばなくなけるなほど、ぎす（久右衛門町代地 福山連 摺工 政吉さく）

寝ものがたりをたゞたのしみにひるのくろふはいとやせぬ（糞町一 安藤 てい女述）

ひさしくあはぬがどうしてゐるか（長うた汐くみ）あふたそのときやついころびねのおび

もとかひでそれなりにふたりがすそへ狩衣をかけてぞたのむ睦言に）あへば互ひにぐちがでる（横山二 桑都連 記ノ蝶さく）

《端唄省略》（日本橋 二見連 ほんとう作）

おもふこいぢもふことしぎりあけりやつとめのうきくろふ（南まき丁 姿見湯楼 登良司 作）

《端唄省略》（二見連 反等作）

《端唄省略》（日本橋西川岸 常磐津桑太夫作）

《端唄省略》（日本橋 二見連 石川亭反等作）

○東天狗木之葉都々一おわり

即席葉唄遊曆都々一并二席上

即席都々一早々売出シ申候

集者 二見連 石川亭反等校

六 流行新令ど、一 夏

（刊年不明。明治初期か。竹堂梅兄作。松延堂版。）

日々新にして改革。万花ひらけし世の中に。新奇を愛る世態なれど。砂糖と児童は甘きがよく。老父と辛はからきが宜からん。是はいつもの甘くち度々一。それへ字言のからきを交へ。仮名字引の書ぬき綴合。新令何とか題号で。目さきばかりを開板の。松延堂にをくりて催を塞ぐも。一文不通の盲目やつこ。蛇に怖なん鹿作なれかし

隅田園門人 竹堂梅兄誌

縦令笑をが誹謗をせうがわたしがねがねでほれた人（はやし）ほうきに内和な他人口おへそがでべそでお茶わかす）

ふわと乗ますアノ人力へてれん手くだのくち車（はやし）お先ッぱしりかひきずりか倣倨で浮薄の尻ッばや）

背叩いて何曰くしこうして来な格子まで（はやし）陳ぶん漢語の廓ことば女学はとくにいらぬ門）

ぶたや牛肉切売せうと色のきりうりやわたしやいや（はやし）賢気で職業励精し主夫と将来そひとげな）

かわした確証そりや儻偶か今更切ろたなんのこと（はやし）きつた小ゆびがつげたならま、にしやさんせ此きせう）

片時も逢はねば愁心おこり思過するのほれた情（はやし）どふして居なましよ今頃はよもや外移氣や出しやせまひ）

何のばちでか弦妓のつとめ三条はちいて客をひく（はやし）ちよんのまげいしややちびげいしやころんでびつこかちんく彈）

睥睨さんすな是でも時節が来れば登庸するころ（はやし）うんとくわはうはてんにありはたまちやおまへのつらにある）

三十六策走不若どふでそはれざそのかくご（はやし）ゑぞ柯太まちや遠すぎるそれでもきんじよじやあぶなかる）

も、のおほこにさくらの娘そげたやなぎのあらひがみ（はやし）冷艶全欺雪の肌媚媚別品上ものだ）

遠離してゐるたがひのつらさかわらないのは空ばかり（はやし）はかないが恋うきが恋ふたりのためならしんぼしな）

うそが誠かまことがうそか初手の浮気は今のじつ（はやし）豆羹鹿食に日をおくり家職に鞠躬今ぢやする）

わちきを廃してあの古狐家内へいれたい下心（はやし）こんくにはなげのひよつとこめにんにやうははびいづくはんにやのめん）

辛い世態あまいはおまへ世帯の車法はまわるまい（はやし）どふらくやめてはたらいて見かへられないやうにしな）

啼てうれしい笑いもいつかあさはなみだのたねとなる（はやし）鶏鳴曉鐘衣々の別またのあふせはいつである）

浮薄詭言な磊落者としらずにほれたがくちおしい (はやし) それでもはなれちやゐられな
いにくらしいほどますおもひ)

もつと奮発鞠射しやんせぐづといはれちや身がたゝぬ (はやし) かせぎな薄荷を眼につけ
てそふしてまいばん長命ぐわん)

一点燈消夢後の涙どふして今宵は来ぬだろふ (はやし) かぜでもひいたかきうようかたゝ
しやほれてができたのか)

従容しやんせよそう倉卒にしては悔期があるわいな (はやし) しつかにしましそこはへ
そあはてさんすなそこはしり)

おまへとわたしはたゞ平凡の中ぢやないのにその疑惑 (はやし) からかいことばやぐちみ
れんやめてこつちをちよいとむき)

きわどい忍逢あふない恋路こ、が命の色のあぢ (はやし) ほんにわけときやにとはねそ
のきでなまものたんとたべな)

月落烏啼で霜天に満エ、もぢれたい茶屋むかひ (はやし) からすに鶏鳴明のかねおちや
屋がわかれのかたきゆく)

なんぼ惚たを見透さりよと侮慢にされてははらがたつ (はやし) わちきがすいきよでき
たゑんもとめてくやし此おもひ)

すまぬこ、ろを笑ひにかくし誤候で座敷をもつらさ (はやし) つとめをひひてぬしのそ
ばわがま、きま、にくらしたい)

形粧もりつばで他見はよいがしみつたれのが玉にきづ (はやし) 見かけだほしなはくじよ
ものしやうばいきいたらいかものや)

爰で不図会合するも宿世あやしき縁である (はやし) 将来おまへがつゑはしら女房にしな
いとつづくよ)

広い宇宙に幾希なるおまへひとのほれるもむりはない (はやし) いろしのとんやのわかだ
んななりひらさんでもおよぶまい)

美酒や嘉肴はたれしもこのむとふなすおさつがわたしやすき (はやし) どてのだんごにい
なりさますいとんぎうにくまたむまひ)

ぬしに傲倨をするのもほんにつらひざしきのうさはらし (はやし) おまへをたよりのこの
つとめしやうわるしやんすといつづくよ)

はでにさく花うつろひやすいじみな松竹たのもし (はやし) 誠実不変の恋濃じやあきず
にさめずにかわらずに)

死ぬほどほれ咄嗟間逢はにやあとへ見かへる人がくる (はやし) きせうせいしは引札でた
いさん板木ですつてある)

七 開化しむふん都々一 初編

(刊年不明。明治初期か。倉田太助版。)

苦勞気がねを積重ねたる末は鍊瓦の樂住居

足を突張両手でおさへ腰をしねつて踏ミシン

唐草見るよな分らぬ文は西洋学者も読かねる

究理木瓜と言んすけれど河童野郎の尻房学者

心がらとて他人の中で恥をかき染土かつぎ

たがひの心にエレキを仕掛ケ言す語らず密りと

通ふ恋路に石橋かけて瓦斯やランプで照したい

空にや風船陸には馬車よ海にや汽船の早便利

火事や雷りや予防も為がなぜに地震は除られぬ

西よ東と隔てしなかも便り待ぞへ伝信機

有名無実の夫であると操たつるは妻の義務

雁が来たかと連子を明て見れば大根を時時分

船はあぶない車はこはい乗てよいのは腹のうへ

姿ばかりの写真じやいかぬ心のそこまで写したい

いきな髪鉄小いきな坊主髻のあるのは二タごゝろ

じんきよしたのかたんせきもちか煙草のむたびゼイが出る

巻て結んだ捕縛の紐が切れて割腹する財布

枕屏風を人目の小楯ぬしの夜討を待て居る

飾る花壇の究屈よりも私しや野菊の乱ざき

恋の淵瀬に身を投鳥田浮も沈も主次第

死なば一所と覚悟はしたが今の開化にや馬鹿らしい

マンテルツボンを召たは宜が袖ない仰がなけりやよい

割て言ない嘶しをそれと先にさ、れて柿のたね

杖よ柱と便りし君は遠き波濤を洋行す

伝信機が便りよ為よな開化の世なら写真に苦舌が言せたい

色の世界と言のが無理か五しき色採る万国図

善も悪きも世間のあらを探して記載す新聞紙

いろはせず京と習つた子でも今じやアイウエオのサシスセソ

おくびに出しても悪いと思や食ぬ顔して知らぬふり

主の此頃顔向せぬは胸に焚火でけむいのか

過ちや悪いと葡萄酒隠し汲器とるのも酷た中

十把束ぢで転ぶといへば解て見せたい胸のうち

義理といふ字に人目をはぢて言たい事さへ胸のうち

親類縁者の異見も聞ず立る意気地の末を見な

乗せて下して(ママ)乗せて客にせはしき陸娼妓おかしようま

神代このかた替らぬものは水の流と恋のみち

海とも山とも分らぬうちに人が指さす噴射絵図

もう言んすな其気休めを疾に見透す硝子張

言に言れぬ私が心髪こんぱつ鉄天窓てつてんそうじやなければども

口先ばかりで腹へは入ぬ主の浮気は巻煙草

ほれたどうして逐寝過して九時の出仕が遅くなる

意気な姿で迷はず猫は着たる羽織もぎん鼠

顔は見へてもガラスの硝子内証せうしばなしが通じない

続く日でも困りはすれど長い雨にも亦こまる

八 藤詩選和解都々一 初編・二編・三編

(刊年不明。明治初期か。上段の註解は省略。)

藤詩選和解都々一 初編

大海に住む鯨と溝に生鯨は煮売屋の行燈に一座をなし松前昆布と五島瑣管は結納台に顔合するも所謂縁は異なるものなるべし頃日李国劉廷琦等が巧み尺せる詩もなまめく唱歌の都々一と蝙蝠傘の相合はいろく混交な世の流行むた書にだもしかざりし拙き史も僥倖と壁ともされで鯨鯨の汁の相手の牛蒡拔に售ると聞て二杯めも三杯めもと請込で味の替らぬ手料理は鉄鍋ならぬ鉄面に昆布の厚みを敷なるべし 弄月陳人記

とりもけものもねぐらへゆけど(晩景寒鴉集秋風雁帰)こひにや心もやみのみち
すいたおかたといつしよにゐれば(鳥道高原去人煙小経通)山のおくでもくにやならぬ
しやうしんさせたいわたしがねがひ(帯甲満天地胡為君遠行)おまへはつとめもうはのそら
ならのみやこにやアノやへざくら(旧苑荒台楊柳新菱歌清唱不勝春)いまはたきこにこなさ

れる

中のよいのでくらはしらず(閨中少婦不知愁春日凝粧上翠楼)とほざかつてはきをませ
いちぎのさわぎでまぎれておれど(笙歌日暮能留客醉殺長安輕薄兒)ひけりやきになるぬし
のこと

あへばわかれがあるとはしれど(巴凌一望洞庭秋日見孤峯水上浮)わかれりやまたあふこと
もある

三日見ぬまにさくらといへど(芳樹無人花自落春山一路鳥空啼)うつりかはるは世のならひ
月のあかりであふたるゆめに(此夜断腸人不見起行残月影徘徊)もしやくるかそとあるき
うみやまへだててとほくにやるれど(燕支黄葉落妾望自登台)わたしのこ、ろはかはりやせ
ぬ

見かへりやなぎについまねかれて(芙蓉不及粧美人水殿風来珠翠香)もどる気になるゑもん
ざか

おもひほそりてうつくすれば(夢裏分明見閨塞不知何路向金徽)しらぬところをゆめにま
で

としのちがふをしつてはおれど(琪樹西風枕簟秋楚雲湘水憶同遊)いつかのつたるくちぐる
見すてられたがわたしのいんぐわ(鳳輦不来春欲尽空留鶯語到黄昏)いまさらどふともいは
れない

そなた思へばかながはくんだり(月明星稀霜滿野種車夜宿陰山下)夜みちいとはず馬車でゆく
かぜのもよりかかきねをこへて(吹笛秋山風月清誰家巧作断腸声)きこへりやきになるひと
よぎり

かみもいふまいけしやうもしまい(辺地鶯花少年来未覚新)つれまともぬしのため
さむいやうだがすだれをまいて(美人捲珠簾深座嘆蛾眉)さけくみながらの雪見ぶね

おもひに思ふてこがれておれば(已見寒梅發復聞啼鳥声)つき日たつのもうはのそら
みやまそだちのやぶうぐひすは(山中無曆日寒尽不知年)はるがきたとてかはりやせぬ

くちでをとこをころしたはては(看取蓮華浄方知不染心)すみのころも世をおくる
はらがたつならた、いておいて(別離已昨日因見古人情)かうといはれりやあきらめる

人のをしへた道をばすて、(清晨入古寺初日照高林)こひのやまちにふみまよふ
わたしはもやひをはなれしふねよ(日落滄江晚停橈問土風)あすはいづくのきしへつく

ぬしとそうにはもとよりかくこ(古木生雲際扁帆出霧中)たとへ火のなか水のそこ
くぜつがすぎればいくさはまけよ(天与三台座人当万里城)かうさんするよりほかはない

ゆくにやゆかれずおまへのくにへ(春風三十度空憶武昌城)大洋へだててなきわかれ

ちわもくぜつもふいひつくし〔晚日当千騎秋風合五兵〕しんのはなしによがあける
むねに手をあてきをとりなほし〔船経危石住路入乱山行〕どふすりやまことがとくだろ
わたしの心はくわじばのはしご〔東風吹野火暮人飛雲殿〕のほりつめてはあつくなる
おやのいけんもちつとはき、な〔今年花似去年好去年人到今年老〕やがてや、うみやおやと
なる

ふさぐ思ひに夜はさへわたり〔玉戸簾中卷不去擣衣砧上扠還来〕むねにさしこむまどの月
はなをかざりてけいはすれど〔陌頭楊柳枝已被春風吹〕みさほのかみはくもりやせぬ
わたしやこれほど思ふておれど〔妾心正断絶君懷那得知〕さきはそれほどおもやせぬ
よせといはれりやついふかばまり〔誰知明鏡裏形自相憐〕いまちやこうくわいぜひがない
ゆきくれた人によどかすあるじのはなは〔日暮飛鳥還行人去不息〕さかりやすぎれどちりは
せぬ

せめてわたしのはんぶんほども〔但見淚痕濕不知心恨誰〕おもつてくれればうれしから

藤詩選和解部々一 二編

二本目は与市も困ると云けんも詩人も既に四五本目秋の扇の夫ならで筆を棄にしをりからに
門家と云んも嗚呼がましく戯者仲間の黛月亭拙子換りに一卜骨折んと忽ち筆を鳥子紙も出来
はよしのの葛引に一簾これで問合紙と仕上たる二十葉御影堂の御影もて此黛月も往々はすゑ
広がりの為せるやう御取立をねがふになん 弄月舍有人記

さびしがらせるあのがりがねに〔烽火西城百尺樓黃昏独坐海風秋〕ふみのたよりをたのみた
い

おもひくしのよの中なれど〔花隱掖垣暮啾々棲鳥過〕花を見すて、かへるかり

そうしたおまへのまことがあれば〔風起春燈乱江鳴夜雨懸〕あめのみちもくにならぬ

ふみのたよりは人めをいとふ〔旦夕更樓上遙聞橫笛音〕しのおあひづにうつ、おて

しやうじひとへのくるふはおるか〔古木鳴寒鳥空山啼夜猿〕みやまにやつまこふしかある

ねるめもねないでしたてたものを〔長安一片月万戸擣衣声〕よそでぬがれちやうまらな

なかよいどふしの子どもでさへも〔借問大将誰恐是霍嫖姚〕いくさこつこはかたきどし

おやもこきやうもすてたるふたり〔常随去帆影遠接長天勢〕とまりいそがぬたびがらす

しんのはなしにふけるもしらす〔冷然夜透深白露沾人袂〕きいておどろく八ツのかね

あめあられゆきやこほりとへだつちやみれど〔寂寞向秋草非風千里来〕とけてしまへばおな
じみづ

うめにやうぐひすし、にはぼたん〔啼花戲蝶千門側碧樹銀台万種色〕ぬしとわたしはつがひ
おし

あそびざらいのゆうげいづきも〔此日遊遊邀美女此時歌舞入唱家〕のちにやにはかでどら
うつ

むかふかみ月の月ならさへて〔可憐樓上月徘徊照離人粧鏡台〕かげがうつればおもひだす
ふねでゆくならきてゆかしやんせ〔孤帆遠影碧空尽惟見長江天際流〕しものよかぜは身にあ
たる

雨のやなぎでしほれちやみれど〔此夜曲中聞折柳何人不起故園情〕たとへかれてもをれはせ
ぬ

た、くせなかはわかれのかねよ〔寒雨連江夜入吳平明送客楚山孤〕むねにひゞきしあさがへ
り

ふねにやとなりもないちはげんくわ〔醉別江樓橋柚香江風引雨入舟涼〕とけてばつたりあを
すだれ

いやなおきやくはみつげなれど〔唯有相思似春色江南江北送君歸〕おもふおまへははやが
へり

つもるおもひのわたしはみゆき〔雪晴雲散北風寒楚水吳山道路難〕ぬしはあさかで見づくさ
い

くびのまはらぬのし、むしやも〔故鄉今夜思千里霜鬢明朝又一年〕ゆくにゆかれぬとしの
さか

かはるまいとはおもつちやみれど〔妾夢不離江上水人伝郎在鳳凰山〕(ママ)

はなを見すててゆくかりよりも〔忽觀雲間數雁迴更逢山上一花開〕おもひくは人ご、ろ
けふの初会のいちぎのうちに〔銀燭吐青烟金尊對綺筵〕とめておきたい人がある

かねを山ほどもつ人よりも〔一擲千金渾是胆家無四壁不知貧〕まづしいおまへとそひとげる
あめにもまる、さくらの花は〔眼看春色如流水今日銀花昨日開〕さかぬうちからちりか、る
とほくうみ山はなれてなりて〔漂泊來千里謳歌滿百城〕おまへとそふならいとやせぬ

わたしの心ちやおまへのことを〔微雨夜來過不知春艸生〕(ママ)

かほを見るにはあさ夕見るが〔吾亦自茲去北山掃草堂〕はれちやめつたにやあはれな
くちさきばかりはきれたといへど〔此地別燕丹壯士髮衝冠〕しんそこばなしはまだきれぬ

あきがきたのかりだすもみち〔秋風不相待先至洛陽城〕しかとしたことはいはしやんせ
くらうしながらつきかみれば〔舉頭望山月低頭思故鄉〕はなれたこきやうをおもひだす

うつらうとしてあるみ、へ〔空山不見人但聞人語響〕きこゆるとなりのちわげんくわ
しのびくかうしのもとへ〔日夕見寒山便為獨往客〕はれちやあはれぬ此からだ

いとしかたに見はなされては〔怪来壯闊閉朝下不相迎〕この世にやみぬきでしぬかく、ひとめ見るよりおまへのすがた〔美人天上落龍塞始応春〕ねてもさめてもめにのこるおもひたへかぬひとふでかいて〔淮南秋雨夜高齋聞雁来〕たのみやつばめのかただよみやませだちのうめさくらさへ〔娼家桃李自芳菲京華遊俠事輕肥〕いまちやていけのこのはな

藤詩選和解都々一 三編

李白が一斗詩百篇とかいへど此都々逸の一篇に德利吉本費さば百篇ならず二斗にや及ばん彼白髮三千丈は御手が鳴のは瀟湘と悟れば浮生夢裏分明池の汀のとうく〔たり御銚子限の御納雪頃は終に月落鳥飛とつば一夜半興染る此史も已に三番目他へはやらじと稿を脱しさらば書肆へ参らしようずる 七赤老人記

登り夜船の秋肌さむく〔亭々孤月照行舟寂々長江万里流〕誰と伏見の貸ぶとんま、よ捨おけわづかなしやばに〔醉臥沙場君莫笑古来征戰幾人回〕すいた事ならずがとく月を見やうがさくらを見よが〔雲想衣裳花想容春風私檻露華濃〕思ひださる、君のこと呑るどふしはつい馴やすく〔蘭陵美酒鬱金香玉碗盛來琥珀光〕下戸ぢやとにかく折めだか月の出汐を真乳の下で〔夜発清溪向三峽思君不見下渝州〕水にかけさへすみだ川馬車や蒸気ぢやまだくおそひ〔朝辞白帝彩雲間千里江陵一日還〕はやく聞たい伝信機わしが心はみやまの鹿で〔樹々皆秋色山々惟落暉〕つまを恋しと夜々になくかるいつとめもしゆつせのこぐち〔寧為百夫長勝作一書生〕あきずに辛抱しやしやんせさが先ならあはずと見ずと〔海内存知己天涯若比鄰〕側にある気でしんぼする月も銀河もはやくれしに〔明月隱高樹長河沒曉天〕あかぬわかれをかこつのか笑ひ出すべき端山の腰を〔淑氣催黃鳥晴光轉綠蘋〕そつとこそぐる春の風米山甚九でふとおいらんが〔忽聞歌古調歸思欲沾巾〕おもひだします国のこと三日月ごろから待たるこよひ〔暫將弓並曲翻与扇俱回〕俄に迷ふたぬしぢやないどこにあるかとそれのみくろふ〔一為遷客去長沙西望長安不見家〕きうり切ても子ぢやものを

隣ざしきの端唄も丁度〔黃鶴樓中吹玉笛江城五月落梅花〕身につまされてはふさぐたね花の初日に思はず更て〔昨夜風開露井桃未央前殿月輪高〕いつか夜明の鶏をきく替り果たと思ふちやぬれど〔却恨含情掩秋扇空懸明月待君王〕もしや来るかとこけみれんどふぞあいたいたまた添ひたいの〔真成薄命久尋思夢見君王覺後疑〕おもひあまりて夢にまで

意気の粹のとはおよばぬことよ〔青海長雲暗雪山孤城遙望玉門関〕やほといふまで百里ある今宵別れていつ逢ふことか〔吳姬緩舞留君醉隨意清楓白露寒〕せめてからすのなくまでも貧すりや鈍子へ寝るせつなさを〔独在異郷為異客每逢佳節倍思親〕じつところへる親のため火宅のがれて世を牛じまの〔科頭箕踞長松下白眼看他世上人〕里へこつそりかくれ住みむかふみめぐり気もすみだ川〔岬色青青柳色黃桃花歷亂李花香〕こ、ろうきたつ春げしきわたしの思ひのと、かぬからは〔楓岸紛紛落葉多洞庭秋水晚來浪〕身でも投じて死ぬがまし花はちりてもまだ香はのこる〔紅衣落尽暗香殘葉上秋光白露寒〕誰と忍ぶがをかの池雨のふる日や日のくれごろは〔浮雲遊子意落日故人情〕おもひ出さる、旅のるすどこで弾やらあらなつかしい〔誰念北樓上臨風懷謝公〕ぬしのつくりしあのもん句あきが来たのかしやくられたのか〔龍就黃扉日威迴白簡雲〕ほかにいろでもできたのか鴛鴦のふうふをうらやむやうな〔盧家少婦鬱金堂海燕雙棲玳瑁梁〕あさいほれやうするものか

秋が来たのかをとづれたへて〔白狼河北音書斷丹鳳城南秋夜長〕ひとり寝る夜のそのながさ雁は古郷へもうかへるのに〔人情已厭南中苦鴻雁那從北地來〕いとし男は東京詰東京はなれた田舎のすまゐ〔遲日園林悲昔遊今春花鳥作辺愁〕おもひ出します隅田の花もしも道中で雨ふるならば〔紅粉樓中応計日燕支山下莫經年〕わしが涙とさつしやんせあづまくだりのなりひらさんも〔紅粉青蛾映楚雲桃花馬上石榴裙〕どちがあやめかかきつばた踏まれた、かれつき出されても〔銅台宮觀委灰塵魏主園陵潭水淚〕もと木に増った花はない秋の夜ながもあふよにやたらず〔蓬萊闕下長相憶桐柏山頭去不歸〕ましてみじかきなつのそらよしや天女が降つて来ても〔借問漢宮誰得似可憐飛燕倚新粧〕おめへに見かへるものはなひ

九 大津入都々逸

〔明治二十三年八月刊。金寿堂版。蒼々堂緑窓撰。上欄の大津絵節は省略。〕

序言

抑此大津入都々逸集は近世名家の秀逸を撰みてものせし粹客必携人種々の心意気恋となさげの二ツ筋道三すじの糸の調子に乗り喉をさかせるきみたちの粹の枝折と綴りなし世に公せんとする故を自慊ながら述るになん

編者しるす

◎新撰都々逸

蒼々堂緑窓撰

- 風に寄そふアノ糸はぎに去とは難面男郎花
- よくも化した覚へてみると見ればちがつたあぶら継
- 来か〜と待夜の闇にヲヤマきだよあぶら継
- 月の光りで玉草よめば虫もきく気か音をとゞむ
- 妾しや未れんが残の暑さ主はもふ来た秋のせつ
- 検査されでも手管の穴はぬしの他には見世はせぬ
- 人目の関所へ抜道よ造りソツト思ひを通したい
- ふられて果報と云れるよりも、て、因果と云れたい
- 金の重みの有のうかと思のふかみはまるきやく
- 死の生るの咄の半途吞込むあくびに出るなみだ
- 甘く郵便うそ書ならべ亦もよこした無心じやう
- 何程泥鰌にめつきをしてもどこか鯰にや見へ兼ねる
- とらへた胸ぐら誤聞までは放しやせぬぞへはらがたつ
- 寺の坊主に朝寝をさせてからすに水銀のませたい
- 先の心にこゝろを置いて心さびしく居るこゝろ
- 文も寄せ算人目をかねてちよつと目つきのかけ合
- 氷る思ひもいつしか解て逢ば互のむねになく
- 忍ぶ心に曇つた胸の晴てお傍へよるの月
- 惚たほの字の骨なし法華主は門徒でもものしらず
- 顔見りや怨みも底抜手桶悟り開てさけ相手
- かさねた布団に重たい臉迷ふ目方も首尾次第
- 赤いしかけに心が迷ひあかい仕着せを着るしまつ
- けちと邪すいのしんにうかけてやばといやみのへんかむり
- 論より証拠にや少しの事を直にからんで切れ言葉
- 晴て夫婦になられぬならば私しや死たいもるともに
- 睨める目にさへ愛敬もつて怖さわるゝぬしの顔
- ほんに呆れた浮気な始末出してやりたい新聞へ
- 智恵のふくろはおほきい程が邪魔にならずに身のべんり
- 立派にやるならお金をおくれ起請誓紙はわしや入ぬ
- 例の是さと母指出されあたまかき〜とけたなぞ
- 寝言いはれて腹立ならば鯨けどるのはよしにしな
- 何ほ流行におくれぬ気でも否だよ肺病税コレラ
- 楽になつたと澄しはすれど心が、りのする地しん
- 胸の算ばんいすかのはしよ免といふ字を来たどぜう
- 嬉しい返事をはがきでよこし配達さんには恥かしい
- 乗て世渡る妾の舟へさしておくれよ水馴れぎを
- おこり散して吞やけ酒が沸立てゐたので舌をやく
- 天から夫婦と極たる二人今更世間が何のマー
- 雨も降らぬに真白の鬼は人にしよはせて帰すかさ
- 先がさきなら妾じやとても角にや出やせぬ窓の月
- 君よちかごろ失敬ながら水性はわるいとする説論
- 雪の肌も今朝吹風にとけてにつこりわらふうめ
- みえや飾りがなにいるものかしんから惚合好たどし
- 死でも地ごくへかたみに持て妾や往ぞへ此写しん
- ゑん切榎を根こぎに持て惚た奴等を打払ふ
- もてないお客と人力挽はかへる〜と云がくせ
- 金銀につまる香車びの角柱故に歩庁へ願て此将棋
- 程も能さそで気もよさ相で金も無き相な男ぶり
- 余所の浮気のはなしを夫と云はず語らずあてこする
- 今宵見めぐり嬉しの森よどふぞ明日も首尾の松
- 春の野山と十三娘日々に色香のますばかり
- あすはお立かお名ごりおしい雪の五尺も積りやよい
- 摺鉢かおせてそりや富士の山味噌をするがの浦じや物
- 思ひ切ます相手に実が無いので意見の惚仕舞
- 田舎医師にも羽おりは似合ふ福らすゞめのもん付りや
- 可愛らしさに水屋の娘あつ〜としゃやかされ
- 帰さないよと抱付ながら内証で財布の脈をひく
- 君をみめぐり隅田のほとりあわす時節をまつち山
- りんと煮たつ茶の湯の釜も水をさゝれて忍びなき
- 洗ひがみした川端柳やどる三日月つけのくし
- 思ふ心の要もゆるみ先が秋とはしらあふぎ
- 思ふ心は八重山吹と云はねど色香に井出の里

- 青柳の糸のもつれがさりと解て嬉しそふだよ月顔
- 女禁制高野の山に誰が植しぞじよろふばな
- 恋の中垣人目をかねて浮世ばなしがして見たい
- 氷る硯にいき吹かけてこぼす涙にしめる筆
- 生れ故郷は田舎の人よ今じや廓のどろの水
- 寝顔のぞいてにつこりわらいのろい人だと舌を出す
- 己惚鏡で顔つくくと三千世界におれひとり
- 怨みも是ぎりモウお仕舞さ宵からこぼした泪丈
- 腹がたつなら徳利をだき中の寝酒が気嫌とる
- 便りに思たアノ針鉄も切りやふつうのでんしんき
- 気休め聞く度気は休らぬ浮気聞く度気が沈む
- 小鳥の名に似た娼妓のたんす開てみなんせ四十から
- 鉢に移さず床にも活ず矢張手折ぬ中が花
- 四角に見へても郵便筒は恋のとりもちして呉れる
- 待どたぎらぬ此鉄びんは誰が水おぼさしたやら
- 此方向たはありや藪白眼惚たと思ふは我が目
- からだに打る、釘よりつらいうしろから指人のゆび
- 二人手をととり山路をたどり草のさへきをもみし
- 跡へ引る、見かへり柳堤に思案の月のかげ
- 癩といふ字を分析したが積る病ひは誰がわざ
- 契て見たれど未だどこやらに在る気少い初なすび
- 賽の河原と主待夜半は小石くがやまをなす
- あわせかゞみか質屋へ飛んで今は流てみづかゞみ
- 秋の月夜も田毎へ移る何処へ真事を尽すやら
- 恋の初瀬の苔のさくら早く手活にして見たい
- 取手おそしと封切る文に誑しまいらせかねかして
- 恋といふ字は言葉の糸よからんで解ないした心
- お近い中にと肩をばうたれ帰りの親父が背をどやす
- 姉は大猫妹は小ねご御座るお客はしろねづみ
- 主の弁舌流る、様だながる、筈だようその川
- 私しや操を立田野なれどもはやお前は秋男やま
- 彼奴の怨と媽アの恪気悪いやふでもわるくない
- のろいお客のよこした文が間夫と泣夜のはなつ紙
- 文をとり揚サラく読でこんな馬鹿とも知なんだ
- 惚た此方は六分のよわみだから四分く聞無しん
- 人目包めど香にあらわるる隅田の土産の桜もち
- 意気よふ粋と口では云どめざす処はかねにある
- 咳で一先しらせて置いて呼出す下駄の音
- 卒塔婆小町の講釈聞てきりやふ自慢が悔悟する
- 親に反甫の孝行娘寝ぐらも定めるからすもり
- もたれか、れば柱にまでも角があるのでま、ならぬ
- 景色よし原さき立花にとび立心のくるひこま
- 泣たりじれたりまた怒たりしても中々出ぬかね
- 浅いこ、ろの妾だけれどお前ばかりにやふかくなる
- 御出立かへお名残おしいせめてかたみにおかねでも
- 明りかき立ふすまを閉て人目しので見るしやしん
- おそいかへりに叩た戸口あけぬ女房のむねのうち
- 色じや程よく欺ちや見たが跡でもしやと明石たま
- 細い煙りを三筋の糸で立ていのちをつなぎざを
- 咲た桜に心の駒を緩して浮れるむかふじま
- 直に切そで切ないものは愚痴と頓馬のくされえん
- 色のいろはを習ふた双紙どふせ末には黒うする
- 逢て嬉しや此俄雨あいぐがさからぬる、そで
- 金はなくなる意気地はつのと、のつまりは人の口
- 間夫にすねられ起した癩を撫て遣ふときざな奴
- 千万無量の思ひをこめてこわさ半分手を握る
- 色けはなれて可愛いものは孫に巨達にかん徳利
- 行義作法は直りもすが鼻の胡坐は直らない
- 花に浮れりや下口さへおとる況や上戸に於ておや
- 車夫の半てん好ない客は浅黄ぞめよりこんがよい
- 今も昔もかわらぬものは水の流といろのみち
- 初会の晩から解たるはなし手管か誠か分ら無
- 誰も居ぬよとらんぶを消ばこ、にと窓から覗く月
- 花に仇する雨風なれど主に居つゞけさせるすゐ

- すねて背中を向ては見たが直に寝がへる気よわさ
- 月の障を主やうたぐりて胸に浮雲かけて居る
- 松と竹とに門守らせて内でのしむとこのむめ
- 線香立くためたる金を間夫にか、つて煙にする
- 嘘は築波のやまより高く実は浅間の山のけむ
- 大序に一筆ひめて置ておかねかしくは切のまく
- 暗く成たら忍と思やくれぬ先からの春の月
- 色即是空と教へししや迦も妻この有にて察さんせ
- 鹿と紅葉も染ないうちに仇な浮名を龍田川
- 誰にやるのかわしや気にかゝる主の袂の血のくすり
- 舎密家頼んで焦る、人の心を分析して見たい
- 女と云字を分析すれば浮世のがれぬくノ一ツ
- 招く此手もお客によつて豎と横とにふりわけける
- 年も若い眼鏡をかけてうそを洋杖つき歩く
- 野郎は否だしお金はほし、ま、よ今夜は口車
- 蚊帳よ線香とあわて、云へば臍を押へて主しや笑ふ
- 千枚ばかりだよ洪紙面で四十しまだの左りづま
- おぼこ娘と思ひの外に卒業してゐる恋の道
- 袴にたれたは欠びの泪お前に出すのは舌ばかり
- 客を返そと障子に立たはふきの影さす間の悪
- 猫のわたしもはなをば摘むお前のふんどしやねずみ色
- 好ときらいが一度に来れば箒立たり倒したり
- 欲しいものならほしいとい、な謎をといてるしまはない
- 遠いお客に云たる無心近い節氣の間にや合ぬ
- 狸寝入其ま、置ば手持ぶ沙汰でのびをする
- 薄いよふでもあのペラくじや重いお尻もしき揚る
- 人の女房とかみなり様は天下晴てはなりはせぬ
- 手鍋提ても添はねばならぬトいふお方は主じや無
- 座敷相場をくるわす猫は一寸二を上げ三を下げ
- 逢たさ六寸見たさが四寸それが積りて糞と成
- 竹と雀は中よいけれど切られりやかたきのゑさし棹
- はらに身のない瓢たんさへも胸にく、りわ付ておく

- オヤ最八時か夜は短いとおつに聞せる床いそぎ
- 縁のこよりを出雲の棚で若や鼠がひいたのか
- 文字の読ない猫社会でも野郎の鼻毛がみんな読む
- 返さにやならない厂とは云ど燕つくまで待しやんせ
- 水かけ論でもしなけりや胸に燃る思ひを消かねる
- あれさおよしよ見られりや悪ひ花を折なと書て有
- 心隅田に気は浮かもめ花もみめぐりはるげしき
- 影でべろりと出す其舌で吸とる鈍馬の身のあぶら
- 猫と成たり狐となつて飽までのろまをくひたはず
- 首を伸たりまた縮たり廊下の足音聞たぬき
- 動けない程年期と尻で借を負ても気はかるい
- 寒いとつい寄添ていつしかはなしが積るゆき
- 拙者此地に用事はないが貴殿見たさにまかり越
- 薬缶天窓の恍話を聞けばほんにお臍が茶を沸
- 実に鏡は正直ものよ笑ひ顔すりやわらいがほ
- 晦日に月見る時節だけれど娼妓の誠にや未だあわぬ
- はやくかへすがお前の為といつてかくして舌を出す
- 左りづまとりはいたる下駄は狐老々々とおとがする

明治廿三年八月十一日印刷

全年月十四日出版

東京市浅草区南元町十五番地

編輯兼印刷発行者 牧金之助

十 文句入都々逸

(明治二十三年八月出版。金寿堂版。着々堂録窓撰。)

茲に都々逸の根元は過し享和の頃に起りいま文明の御代にいたり一層驚くべき風調あり都鄙村落に到るまで貴賤上下の分ちなく皆此唄を好まぬはなし然れば新調の詞の花の濃き淡き腹をうかてる新文句ヲあつめ一ト巻の小冊とし別嬪達やお小供のいさゝか一笑に供するのみ

編者記

文句入の部

- 浮名たつたと気はもみぢばの(忍草) 思ひそめたるしのぶくさ) 赤くなる程はづかしい
- 針がねのものをいふよな開化の世界(義太夫一ノ谷) 我子の死顔に胸はせきあげ身もふるわれ持たる首のゆるぐのをうなづくやうに思れて) 写真の答をなせしない
- 篠をつがねてつくよふなあめに(清元) 垣を取られてまる木ばしやオットあぶないすでのこと) ぬれて通ふも恋のみち
- 恋にみだれて此投鳥田(文字) 見そめてく) 恥かしの森の下つゆ思ひはむねに) はれて結ふ日はいつだらう
- 野暮を宥めてやうく来たと(ごん八) 泣てだましてあやなして) またもその手でまわしべや
- 察しておくれよ私しのこ、ろ(ごん八) それに其よなどふよくな若水くさいすね言葉) まことあかすはぬしひとり
- わるいこと、はさとつてゐれど(すしや) 女のあさいこ、ろから可愛らしいといとしいと) おもひこんではやめられぬ
- とても此世でそれれぬ二人(今宵かぎり)と突つめし鐘も身にしむかせのあや) はやく殺してくださんせ
- 真のやみ夜に桜をけつり(義太夫) 思ひの念がと、いたか久我さま川へ御おりなさる、) 赤いこ、ろを墨で書く
- 二世も三世もかわした中を(清元) ねぐらを出てしよんぱりと世を秋雨のからかさも人目忍びてあやぶむ道夫も何故のささるを不義じやの何のかのへさる今日は明日のきのへねとしらでかわせし事始め其ひめはじめ引かへて今は命も亡ぶる日) 反古にする気かこの誓詞
- 藪鶯の私し、やとても(トキワツ) そりや聞へませぬ才三さんおまへとわたしの其中は昨日や今日の事かいな屋しきにつとめた其時にふつと見そめて恥かしい恋のいろはを袂からそつと妾が心では天神さまへ願かけて梅を一生たつたぞへ) なくねにかわりがありやせまい
- はらがたつならこのこをちよいと(一中ぶし) この手がしはのどちらむいてあさんしても顔見にやならぬ心気のどくいとしさの) 中の能いとき出来た子だ
- 帰る羽おりのたもとにすがり(義太夫) 短かい夏の一夜さに忠義のかくる事もあるまい) しくじりやわたしが立すこす
- 妾しをじらして浮気風に(清元) 夕日のいろも昨日けふ心ばかりの春霞) きててこすへにやつこ佩
- 夕べの夢が迷ひのたねよ(清元) 然もさくらの初日の夜半でお一座の其中でツイおかほれの浮気から) 今じゃふたりのみのつまり

◎都々逸

蒼々堂緑窓撰

- 人はすゞしと云川岸になぜか虫が身をこがす
- 親の為だと苦界のつとめすれば他人でまたくるふ
- 立てみせませわたしの操主にお金のあるうちは
- 私しや恋路の専売特許受売や体のつゞくだけ
- きしよふがわりにかんざしよ渡し胸の実を明石玉
- 文はやりたし文句は知らず実意通すにやかねが無
- 女ごろしの主や罪つくり金つくりには出来ぬわざ
- 七分三分のお金の色で尻を持上るかるわざし
- 送る手紙は二重に封じ中は一重にねがひます
- 私しゆりん気はうけ売なれど主の浮気はおろし売
- 指を切ふとしたかみそりで今日は嬉しくそる眉毛
- 中の能から起つた事を誰がさいばんするものか
- 小石川いと私しや思ふのに主はおへそでお茶の水
- 一寸つめられ嬉しい夢が覚りやあり)のみのあと
- 是はわたしの替紋など、うそを指輪のかげのろけ
- 二人並んで写した写しん切れてもみれんで捨られぬ
- ま、よ今年も飯炊炊しく杯と下婢の筆はじめ
- いろで燃たつ私や緋ぢりめん主は浮気な水あさぎ
- 不実なおまへと声くもらせて情で降せる涙だあめ
- 白粉でかくすあばたもどこやらしれる羽織小紋の染返し
- 私しや溜ぬり実意だけれど塗師のつやけし浮気せう
- 忍びく)で逢のが花よ妻と定まりやきよくがない
- 焦れ死ぬさへ私やいとわぬになんで浮気が辛かるう
- 恋の暗路に迷ふてゐるをランプ親父が見する
- 地しんがいやなら官員止てそして田舎の藪すま居
- 釈迦もあみだも地藏も不動も今は開化の蚕紙
- 浮名立られ今さら逃りや名譽回ふく出訴する
- 主をまつちと誰しら鬚の逢ふて心もすみ田川
- 姿やさしさあの糸柳かほの桜に手ももみぢ
- ほんに否だよ夜明の鐘と借たお金と此きがね

- 問夫の気兼は三筋で取て客を乗せるは口車
- 娼妓のなみだに涎を流し親のあせまで水にする
- 今か〜と松葉の私し焦れながらにたく蚊遣
- 羽織させかけ行先たづねすねてたんすを背でめる
- 草の戸ほそにする立咄し虫もきく気か止る声
- 渋い濃茶の二人が中を水をさ、れりや薄くなる
- 大工頼んでかんなでそつと立つた浮名をけづりたい
- 猪口との言葉の揚足取ですねる銚子にさわる爛
- 忍ぶ恋路のせきの戸取で建てやりたいひとの口
- 雨の降る夜に来るのは能がせめて恋路が気が掛
- みさげしやんすな蓼かふ虫も透を駈つて問夫が来
- 暗れぬ此身の心を知らずしえる月夜は恋のやみ
- おや〜左様かへおや〜主がおや〜あそこへオヤ行の
- 酒が云せる無りとはしれどあまりくどくて腹が立
- 酒は極りの狂気水よめば銚子がくるいだす
- 水鶏に誑され鳥にせかれ鳥にも苦勞をする恋路
- 妾しの意見を徳利と聞て皿りと浮気は止にしない
- 逢ばあふとて目元がうるむ泣になかれぬ人のまへ
- 夢でも可から持たいものは金のなる木によいよう房
- 寧そからだも手紙にふうじ人めの関所を通したい
- 帰る風して羽おりを着れば留る風してペロリ舌
- ぬしは口中わたしはわき臭ほんに二人はくさい中
- 実明せばうそだと云ふし明さにや不実と云だらう
- そつとうらから返したけれど履が気に成雪の朝
- 櫛をさしたり白粉したりそしてお客をつるしがき
- 未来で罪とがうけよがま、よ現世で悪性がして見度
- きつとごますよと時計を質に取れて茫然朝がへり
- 問夫を夜明に突出す鐘はいつもと違って耳にたつ
- 銅ちゃん隠居で銀ちゃん洋行心はそいはお紙さん
- 右に主の手左にペラをつかんで遊歩がして見たい
- 真面目な顔してそろばん持ど目先にちらつく廓花
- 恋し〜が病となりて余所の人かと見る写しん
- 辛抱さんせよしばしの間二月半たちや止むうはさ
- 義務が立ぬの世間があるの何の彼のとて能く逃る
- 浮たどふ士と云はれる筈だ涼みふねから出来た中
- あがりや餌にする素見客を見てはきを揉かごのと
- 京も田舎も支那西洋も弱みの有のはほれたはう
- 昇る日影もゆたかな空にけむる柳のながづ、み
- わけりや二ツの朝顔なれど一ツにからんで花がさく
- 巡查も殆ど説論に困じグヤ〜なんぢを如何せん
- 逢ぬ涙で両袖しめし逢ば涎でありぬらす
- 可愛がられてまた責られて今じや手いけの夏の菊
- 義りも道理も承知だけれど主の為には替られぬ
- 主を忍ばず此しをり戸に植たわたしのみさほ竹
- 赤いきれをば冠つて化て客を喰ふ気で居るきつね
- 牛のにこみで白馬呑でうしと馬とで二ひやくもん
- 後はなみだで暮そとま、よ明日は笑顔で別れたい
- 鼠鳴するあの猫の鼻つめたいお尻でばかしやがる
- 逢たい見たいを停止にさせて苦勞が禁獄為ばよい
- 私しや気が、り夫婦は二世よ若や此世は二世めかと
- 三筋弾よりお髻を曳て早くのりたい玉のこし
- 碇のおらせぬお前の浮気妾しや心にか、りふね
- 恋の会議を出雲で開き鐘とからずを廃たい
- 聞た意見は煙りにすれど立た浮名は胸こがす
- 更て待夜に身にしむものは蕎麦の風りん川千鳥
- 羽織着たま、つい転寝の数が愒気のためとなる
- 恋の迷ひ路あかりはいらぬ人目憚ることばかり
- 逢て恨みを夕立雲もはれて嬉しきいろの虹
- 女にや欺され勤はあがりそして揚ぐが新聞紙
- 寄とさわるとお米の噂やがてはつ九せうするであろ
- 早くお前を鯨にさして二人ぬら〜暮したい
- ぬしの心も知れない中に惚たわたしの気がしれぬ
- 手鍋提ても添はねばならぬといふお方は主じやない
- 主もするなら私もするよ浮気くらべじや負はせぬ

- 首尾か不首尾か不首尾か返さぬ女に待女房
 - 座敷相場をくるはす猫は一寸二をあげ三をさげ
 - 起請誓詞を活字ですらせ宛名と月日を明ておく
 - 親の意見と霜夜の酒は五ざう六腑へしみわたる
 - 吹ば飛ぶやうなわたしだけれど尻の重みが多分ある
 - 糸瓜野郎が大きく成て恩ある垣根をおしたほす
 - 逢ふた其日の心になりて逢ぬ其日もくらしたい
 - 意気や男や気まへじや行ぬ粋はおかねを呉る人
 - 口の車とまはつた酒であそぶじかんの度ぐるふ
 - 小鳥の名に似た娼妓のたんす開て見なんせ四十から
 - 腹を立てて又笑せて嬉しがらせて泣すのか
 - 竹と雀はよい中なれど切りやかたきの餌さしぎほ
 - 古釘みたやふな文をば書て主の浮気をうつ、もり
 - 惚ずに惚てる顔して居れば惚ぬお客がほれて来る
 - 名残おしさにまた見にきたよ雨の夕べかはなのかは
 - 心づくしにはかまを取せぬれるよめ菜のはるの雨
 - 月夜がらすとも云ふ花はそら鳴よする度迷はせる
 - 莞爾笑ふて指たる猪口を澄して返盃は水くさい
 - ぎやつと一声びつくりさせて暗の野道でふむかわず
 - 重ねふとんに鞆丸ひろげ足音うかゞひ居るためき
 - 暮の六時は待わびたれど明の六時はさてはやい
 - 内所の意見を横そつ方へ聞て意気地を私や立る
 - 金とちからは少しもないが惚ぬ女でせんびせぬ
 - 実のあるのが却へつて苦勞人にもそんなであらふかと
 - 右の通りとたしかに惚てかくの如くとくらふする
 - 惚たはわたしが重々わるひ可愛といふたはぬしの罪
 - 炬達で出来たる恋路にあつく成て今日は涼み舟
 - 寒い〜とつい寄そふていつか咄しがつもるゆき
 - 拙者此地に用事はないが貴殿見たさにまかりこす
 - かよわい腕でもかんしやく力すねた枕をねぢかへす
 - 晦日に月見る時節だけれど娼妓の誠にやまたあわぬ
 - 恋の重荷を車に乗せて胸で火をたく陸じようき
-
- 親の意見を聞度ごとに主の詞をおもひ出す
 - 早くかへすがお前のためといつてかくして舌を出す
 - しばし留たい其本心はぬしのお金がほしいから
 - 好でもとめたわたしの苦勞好る貴郎がおいとしい
 - 思たばかりで届かぬ恋の届く器械がもとめたい
 - 主はそんなになぜ邪するだろなぞと矢張欺すやつ
 - 食付やはなれぬ風は可愛蚤の飛逃にくらしい
 - 人に頼めばうき名が恐し二人じや文殊のちゑも無
 - 間夫の手紙の書そこないを客に其ま、間にあわせ
 - 別れに着せたる羽織の紋も影と日向とある恋い路
 - 酸も甘も能しる人は浮世の辛みもなめてみる
 - 恋と欲との二筋かけて私しや三筋をひく家業
 - 娼妓にや実なし杯いふ人に見せてやり度奴の実
 - どふせ読れて仕舞た鼻毛今更抜くのはむだな事
 - 儘になるなら襦ばんに成てぬしの肌身を守りたい
 - 主へ三すじの電信かけて気をひく一坐のうた便り
 - 金銀なくなりや飛車たがないと香車も頭を角計り
 - 花街通ひと士族の商法すつて仕舞はにや目が覚ぬ
 - 遠ざかつて又アイウエオ変らぬ誓ひをタチツテト
 - 金銀どころか紙くずさへも無て冷しい蔵のうち
 - 才子ぶりする鈍馬な野郎尻のしまりもないくせに
 - 酒と女はかたきと知て居ても又くふだましようち
 - 何どきなりともひかしてやろと風の神めがぬかしおる
 - うそをつくまの鍋ではないが重なる思ひに増くろふ
 - 末が苦勞になるのは主の浮気と諸しきだか
 - 主は上等わたしは下等人が中等で邪魔をする
 - 燈火の暗くなるのは出雲の神かたゞし苦勞のし初か
 - 主の言ばについじれが来て思はず引さく枕らがみ
 - 角力じんくでやうく客に出るもスツチャン爺のため
 - 愚痴がこぼる、おもはずしらす堪へ袋のきれめから
 - 写真とるなら硝子にさんせ裏からおまへのはらをみな
 - 私しや桜よ主や春霞首尾をよし野の山でそふ

- 花に邪魔する雨風よりも恋の邪魔するにくひしと
- 心にもない此そら文をどふしてわたしが書たろふ
- 人の噂にせ間もせまく今のおもひかかくしづま
- さざなお客と井にわく水は金けが無成や茶にされる
- 否な座敷と嬉しい座敷私や泣たりわらつたり
- 民権論者のなみだがたまりや頓て自由のふちと成
- 義理も不義理モあわれなむりも札の紙から湧て出る
- 煙草も印紙を貼上からはわすれ草とは云しやせぬ
- 傘の骨にからんで降春雨はどふせ花ちる廓がよい
- 梅よ桜よ柳よも、とさうは一人じやもちきれぬ
- 汽車まで通へば苦なしにゆくが矢張お足が先へたつ
- 主のうわ気が種まき散しや私しやりんきの芽を出
- 命さへもと契つた人に帯やきものをぐらされた
- 更た座敷をちよつくりはづし色気はなれは大胡坐
- 胸にわき立蒸気を主のおそひ車に仕かけた
- ほんにあなたは気短など、云つ、箒をそと立る
- 文明開化の御代にはなれど矢張苦勞はもとのま、
- 才槌あたまも私が見ては打出の小槌で捨られぬ

明治廿三年八月十一日印刷
 全年月十四日出版

東京市浅草区南元町十五番地
 編輯兼印刷発行者 牧金之助

十一 こ、ろいき辻つらど、一

(刊年不明。明治初期か。越村屋平助版。)

(見返)

新選六十四卦

心意気辻占都々一

東都 越村屋平助板

此うらなひの仕やうは常に信心する所の神仏をいのり心に思ふ事を念じ何とぞ吉凶を告給へ
 と錢三文づつ、を兩の手にてよくふり二度なげいだし形のかたを黒とし波のかたを白とし本文
 の○○(白黒)にあはせてうたのよしあしにて其身のねがひ望身の上等に引くらべ唄の心を
 よくすいりやうしてはんだんすべし善悪ともに其人の信ずるによる所にこそ

一縁だんの吉凶

一男女の相性

一願ひのぞみ

一待人の遅速

一身の上の考

一行すゑの事

◎にあらざれば何にても表うらあるものを右の易にあて用てよし

●●●●●乾为天

思ふ念力とゞいたうえは行世つきせぬさゞれ石

○○○○○○坤為地

ひんなくらしにおもはぬおまへすえのとげやうはずがない

●●○○○水雷屯

神や仏のちかひもあらばやがて其身もすみ田川

●○○○○山水蒙

ぬれたことからついで娘ご、ろの五月雨

○○●●●水天需

壁に耳ある世の中なれば隠しおうせることはない

●●●○○天水訟

露にうかれて来ててふくも風がちやまする世のならい

○○○○○地水師

水をあげてもためなをしていけて久しきものぢやない

○○○○○水地此

しんの余城ぢやわしやないけれど思ふ念力おもふ程

●●○○●風天(ママ)

なしたなんぎはのがれもしやうが人に天震まぬがれぬ

●●●○○天沢履

始手はこはいは思ひの外にやがて無運となるしらせ

●●○○○○○沢天夫

時とせつと世のことはぎに雨となる日も風となる

○○○○●●○天風姑

縁につながり糸にしの尾繩されどおまへのむりばかり

●●●○○○沢地萃

めぐりあふ世もまたあらうかと仏だのみの身のつとめ

○○○○●●○地風升

出船入船そのある中にわたしやまよいて真帆片帆

●●○○○○○沢水困

人の富のをうらやむよりも己が貧せぬやうにして

○○○○●●○水風井

夢になりともしらせんものとむすめ心のものあんじ

●●●○○○沢火革

たとえ世間で笑をとま、よ神がむすびしゑんぢやもの

●●●●○○○火風鼎

家やゆかしきあの琴の音と人はいはる、しどけなさ

○○○○●●○震為雷

手水鉢にて手を清水にちらす清玄桜ひめ

●○○○○○良為山

貧苦くにおひまはされて末にやこの身のおきどころ

●●○○○○○風山漸

硯引よせかく玉ふみはやがておのれのほぐとなる

○○○○●●○雷沢婦妹

主をわたしは木立にとりて化さる、とも氣にかけぬ

○○○○●●○雷火豊

人の恵のかずかさなりて神のめぐみもやがてまた

●○○○○○火山旅

心がらとて身を喰つめてたよりのなき身の置どころ

●●○○○○○巽為風

鳥の雛さえずなく音をまねる親はこひしき雉子のこゑ

○○○○●●○兌為沢

仏迷へばぼんぶのやうとたとへ世間で言はいへ

●●○○○○○風水渙

常にゆだんのない人ならば何に驚くことがある

○○○○●●○水沢節

野辺に飛かふ蜜ぢやないが心がらゆえ身をこがす

●●○○○○○風沢中孚

これかあれかと迷ふて居てはいつも定まることはない

○○○○●●○雷山小過

悪き心をさらりとやめておにも仏となるならば

●●○○○○○水火既濟

雪の降のはそりや幾日でもはれりやとけるが世のならい

●●○○○○○火水未濟

椿る心にまことをこめてやがて夫婦と成田山

十二 「恋の辻うら」都々一独うらなひ

(刊年不明。明治初期か。判断文省略。)

恋の辻占独り判断

このつぢうらの仕方はぜに六文を手握りなむ乾元かうりくくと三べん唱へその銭を投
出しその銭の並びしとをりを引合せ歌の心と判断とを見てその吉凶を知るべし

○○○○○○○白は波の形なり

●●●●●●●黒は文字の方なり

●●●●●●●乾为天

まほに受よく乗出す船もふとした風からあと戻り

○○○○○○○坤為地

若や夫かと閨の戸明りや月はおぼろに啼水鶏

●●○○○○○水雷屯

花に靡くも世渡り故にこちは三筋の糸やなぎ

●○○○○○山水蒙

ちから揃へば踏石さへも揚てゆるがす霜柱

○○○○●●○水天需

顔は見ゆれど互ひの胸を明て言れぬガラス窓

●●●●●○天水訟

苦勞気がねを積重ねたる二等煉瓦の樂住居

○●●●●○地水師

ひよく連理と契りし中も仇な風して気がそれる

○●●●●○水地此

心の苦勞もしばしの間昔語りの種となる

●●●●●●風天小畜

月の誠はうつらぬ筈よ池にや浮気な草がある

●●●●●●天沢履

新聞へ出された時には恨んだもの、斯成りや二人の結ぶ神

○●●●●●地天泰

赤いしかけて迷はすものは恋の手管の教道師

●●●●●○天地否

アレサおよしと払つた手先いつか枕の下になる

●●●●●○天火同人

酒も豆腐も自由な廓で聞は果報かほと、ぎす

●●●●●●火天大有

右と左りに妾と女房酒と肴で樂遊び

○●●●●○地山謙

うひもつらひも恋路の習ひ辛抱仕とげて宿の妻

●●●●●○雷地予

花よ涼と樂しむ内にいつか吹こむ秋のかぜ

○●●●●○沢雷隨

心と心があいさへすれば性が合ふが合ふまいが

●●●●●○山風蠱

かたいお前と思ひの外にみかけ計りの夏氷

○●●●●●地沢臨

月夜がらすと止ては見たが嘘のつけない鐘のかつ

●●●●●○風地觀

床の花よと詠むるうちにいつか色づく室の梅

●●●●●○火雷噬嗑

曇る噂さも訳さへつけば晴てうれしい梅雨の空

●●●●●○山火賁

主の此頃顔向せぬは胸に焚火でけむいのか

●●●●●○山地剝

おぼろ月夜がさらりと晴て忍ぶ恋路の邪魔をする

○●●●●●地雷復

思ふお方は兵士にあたりわづか三とせが百千年

●●●●●○天雷无妄

端書便りどや人目が多い中を知らせぬ封じ文

●●●●●●山天大畜

花に來りてたはむれる蝶も居所さだめぬ花ごのみ

○●●●●●山雷頤

添れにや死ぬとは開けぬことよ命ありやこそ末もある

○●●●●○沢風大過

同じ人でもお客と車夫は車へ乗す人曳す人

○●●●●○坎為水

すかぬお客に見受をされて樂も苦の種主のたね

●●●●●○離為火

風のまに／＼アノ浮草は岸を定めず花がさく

○●●●●○沢山咸

枕あいてに写真をながめ主とそひ寝をしたごゝろ

○●●●●○雷風恒

ぬいたりはめたりして居るうちに足をいためる出来のくつ

●●●●●○天山遯

灯火の蔭に迷ふてうか／＼來ると命すてるぞ夏の虫

○●●●●●雷天大壮

まだか／＼と夢中に成て欲に手を焼く米会社

●●●●●○火地晋

心うち解下紐までもとけてかたらふ好た同士

○●●●●●地火明夷

うそじやないよとことわる丈に猶もうたぐる胸のうち

●●●●●○風火家人

Dodoitsu (Japanese Limericks)

KIKUCHI Shinichi

Abstract : This is a presentation of *dodoitsu* (Japanese limericks). *Dodoitsu* is a song sung to the accompaniment of a *shamisen* (*samisen*). It was popular in the Edo, Meiji, Taisho and Showa periods.